〔言塵集四〕一稲いなくぼとは稲の種の名也、○中略　葉白と云はおくて也、

〔日本釋名下米穀〕晩稲　おくれて出る也、おそく穂にいづる也、ては出也、

〔圓珠庵雜記〕おしねはおそいねといふことを、そいの反しなれば、つゞめていへるなり、おくては奥手にて異名なるべきを、おほくはおくてとよめり、

〔傍廂後篇〕おしねとをしねとは異なり

おしねは晩稲にておくてなり、早稲をわせといふ對言なり、をしねは小稲にて、美稱なれば、早稲晩稲共にいへり、新勅撰集、散木集などに、わさ田のをしねとよみしは早稲なり、新撰六帖に、濱田のをしね打ちなびき早刈しほに成りぞしにける、とあるもわせなり、續古今集に、しら露のおくてのをしね云々、新續古今集に、夕霜のおくてのおしね云々とよみしは、おくて即おしねなり、おしねはおくてにて、をしねはわせおくてともにいへり、

〔增補雅言集覽十遠二〕をしね小稲　春海が假字拾要云、をは發語也、をざゝ、をすゝきなどいふをと同じ、稲としねは古へ通はしいへり、孝昭天皇の御名を、古事記に御眞津日子訶惠志泥命とあるを、日本紀に觀松彥香殖稲天皇としるされたるは、稲を志泥の假字に用られたる也、又催馬樂に、みしねつくともあり、此外に古人の名に甘稲などいへる類多くありをしねといふ詞は、古き歌には見えず、堀川百首に、仲實朝臣、秋田かるをしねのひたはへたれど稲負鳥の來なくなるかな、また俊賴朝臣、秋かりしむろのをしねをおもひ出て春ぞたなゐにたねをかしける、又同じ朝臣の散木集に、かつしかのわさ田のをしねこぎたれてなきもたゆれどつきぬ涙か、又同じ朝臣の新古今集に入たる歌に、うき身にはやまだのをしねおしこめて世をひたすらにうらみわびぬる、新撰六帖に、光俊朝臣、浦風に濱田のをしねうちなびきはやかりしほになりにけるかな、これらの歌はたゞ稲といふべきを、をしねといへる也、さるを安元二年十月右大臣家歌合に、初雪とい